

テディベアプロジェクトによる国際理解教育に関する一考察

朝倉 淳・林 万青也*・小原 友行・深澤 清治・神山 貴弥
(2007年12月3日受理)

A Study on the Education for International Understanding through “Teddy Bear Project”

Atsushi ASAKURA, Masaya HAYASHI, Tomoyuki KOBARA,
Seiji FUKAZAWA and Takaya KOHYAMA

Abstract. This paper addresses the issue of the education for international understanding through a case of “Teddy Bear Project” between Mitsuiyou Elementary School in Japan and Elmhurst Elementary School in North Carolina in U.S.A. Children of each partner school exchanged a “Teddy Bear” and they wrote a diary from the bear’s viewpoints. Our results based on children’s descriptions in their dairies suggest that this project can promote education for international understanding, especially understanding of their own culture, understanding of their identities and their self esteem. The “Teddy Bear Project” was found to be very successful in to enhancing understanding and acceptance of diverse cultures.

1 はじめに

政治, 経済, 文化など, 様々な分野でのグローバル化が進行している。これからの社会を生きる子どもの育成という観点から, 学校教育においても国際理解教育¹がますます重要になっていると言えよう。本研究は, 筆者の一人である林万青也が東広島市立三ツ城小学校(以下, 三ツ城小学校)において実践した, いわゆる「テディベアプロジェクト」²の取り組みを事例にして, 国際理解教育としての有効性を検討することを目的とする。

本小論においては, まず国際理解教育の目的について整理した後, テディベアプロジェクトの概要を示す。次に, 本事例の概要を示し, 子どもがクマのぬいぐるみの日記として記述した内容を整理する。続いて, その結果を国際理解教育の目標を観点として考察し, 本事例の国際理解教育としての有効性を検討する。

2 国際理解教育の目標

国際理解教育の目標は, 論者や実践校などによって様々であり, 共通化には至っていない。しか

し, 本研究は, 実践した事例の国際理解教育としての有効性や課題を検討するため, その目標を整理しておく必要がある。ここでは, 子どもの状況を具体的に捉えるため, 国際理解教育の目標を, 総合的な目標としてではなく観点別に整理した形式で設定することとする。

国際理解教育の目標の観点や指導の視点などが示されている先行研究としては, 例えば, 佐藤裕之(川崎市総合教育センター), 東京都教育委員会, 静岡市教育センターなどが作成した図表等が見られる。

佐藤は, 国際理解教育の目標を, 情動・価値観, 認識・理解, 行動, の三つのレベルで構造化している。表1はそれを簡略化して示したものである。

東京都教育委員会は, 国際理解教育の目標を達成するための指導の視点として, 人間理解, 文化理解, コミュニケーション能力の育成, 世界的視野の育成の4点を設定し, 表2のように説明している。

静岡市教育センターの研究グループは, 国際理解教育においてめざす子ども像を「他文化共生社

*東広島市立三ツ城小学校

会へ向けて行動できる子」とし、目標の構造を理解、態度、技能の3観点で示している³。理解には、社会理解、文化理解、ひと理解を、態度には、協力、他尊、セルフエスティーム（自尊感情）を、技能には、コミュニケーション能力、表現力、判

断力、思考力、情報活用力を示している。その中で表3の4観点を重視している。

三つを概観するならば、文化理解やコミュニケーション能力など重なる部分が多いものの、共通でない独自の部分も見られる。ここでは、事例について有効性や課題を検討するという観点から、重なる部分を統合するとともに、それぞれの独自の部分も組み入れ、ある程度網羅するような形で設定しておきたい。本小論では、国際理解教育の目標を観点別に表4のとおり整理することとする。

表1 国際理解教育の目標⁴

国際性ある子ども像（総合目標） 広い視野をもち、たくましく生きる子ども	
A 豊かな社会性をもつ 【情動・価値観レベル】	A-1 自尊感情の育成 A-2 生命・人権の尊重 A-3 平和・共生への態度
B 違いを認めて理解し 合える 【認識・理解レベル】	B-1 自文化理解 B-2 他文化理解 B-3 相互依存関係理解
C 主体的に自分を表現 できる 【行動レベル】	C-1 思考力・判断力 C-2 自己表現力・行動力 C-3 コミュニケーション能力

表4 観点別に示す国際理解教育の目標

	観 点	項 目
I	関心・意欲・ 態度	① 自尊感情 ② 他尊感情 ③ 協力する態度 ④ 生命・人権の尊重 ⑤ 平和・共生の態度
II	知識・理解	① 自文化理解 ② 異文化理解 ③ 相互依存関係理解 ④ 自己理解 ⑤ 他者理解 ⑥ 地球規模の今日的課題の理解
III	技能・能力	① コミュニケーション能力 ② 思考力・判断力・合意形成能力 ③ 行動力・実践力

表2 国際理解教育の指導の視点⁵

人間理解	自分と異なる考え方や生き方をする他者の存在を認め、尊重する能力・態度の育成
文化理解	日本や諸外国の生活や文化の違いを正しく理解し、尊重する能力態度の育成
コミュニケーション能力の育成	自分の考えをはっきりと表現し、相手と気持ちを通い合わせることでできるコミュニケーション能力・態度の育成
世界的な視野の育成	世界的な問題や課題への興味・関心を高め、それらを積極背的に解決しようとする能力の育成

3 テディベアプロジェクトの概要

テディベアプロジェクトについて、iEARN (International Education and Resource Network)⁷のWebページには、次のように示されている⁸。

表3 国際理解教育において重点をおく4観点⁶

協力する態度	・みんなで考え、やってみようとする態度 ・相手と交渉し、合意形成していく態度
コミュニケーション能力	・自分の考えや気持ちを伝える力 ・人の考えや気持ちを聴く力
文化理解	・現在の文化を理解する ・文化を形成する背景を理解する
セルフエスティーム（自尊感情）	・自分自身を肯定的に認められる ・自分を価値あるものとして誇れる ・自分に自信がもてる

The Aim of the Project	
The aim of the project was to learn team pairs of schools and have them exchange a "Teddy Bear" or other soft toys. The bear then sent home a diary by email describing its adventures, the places it has been, as well as the things it had seen and done. The project aimed to enhance understanding and acceptance of diverse cultures.	
CURRICULUM	
Language Arts, Study of Society and Environment,	

CONTRIBUTION

This project provided the stimulus for children to learn more about other places and cultures through the bears' experiences, fostering, tolerance, understanding and hopefully breaking down cultural barriers.

また、JEARN (Japan Education and Resource Network)⁹のWebページには、次のように示されている¹⁰。

クマのぬいぐるみを「親善大使」として交換し、お互いの地域の様子を学習するプロジェクトである。ぬいぐるみのクマを親善大使としてお互いに相手校に派遣。相手校からやってきたクマの立場・視点で子供たちが書いた日記を交換することにより、相手国の文化や習慣を学ぶものである。

このように、テディベアプロジェクトは、パートナー校の子どもたちがお互いにクマなどのぬいぐるみを交換し、共に過ごす経験をするものである。外国からやってきたクマのぬいぐるみを仲間の一員として受け入れ、学校生活や家庭生活のお世話をしたり、クマのぬいぐるみの視点で日記を書いたりするのである。ぬいぐるみは一定期間の滞在の後、帰国する。

このプロジェクトを通して、子どもたちが他の国や地域の文化や習慣について理解を深めることや、文化的な障壁を取り除くことが期待されているのである。

4 本事例の概要

4.1 事例の背景と経緯

三ツ城小学校は、2000年度開校の新しい学校である。グローバルパートナーシップスクールプロジェクト(1999年～2002年)において、米国ノースカロライナのElmhurst Elementary School(以下、エルムハースト小学校)から教員を受け入れた実績がある¹¹。また、日常より様々な国際理解教育に取り組んでいる。今回のテディベアプロジ

エクトの事例は、エルムハースト小学校TAGクラス¹²教諭のスーザン氏(Ms. Suzanne Hachmeister)からの申し出に基づき、広島大学グローバルパートナーシップスクールセンター(GPSC)¹³がコーディネーターとなって、両校の間でのいわゆるテディベアプロジェクトが実現したものである。三ツ城小学校の担当者は、既述のとおり同校教諭の林万青也¹⁴である。

4.2 実施状況

エルムハースト小学校のクマのビリー(Billy)君は、2006年1月15日に三ツ城小学校に到着し、3月26日に帰国した。三ツ城小学校のクマのそら君は、2007年1月24日に学校を出発し3月12日に帰国した。

ビリー君、そら君はそれぞれ、訪問校において児童とともに学校生活を行い、夜は児童の家庭に順次ホームステイをした。ホームステイを受け入れた児童は、クマのお世話をするとともに、それぞれのクマの視点で日記をつけ、翌日一緒に登校している¹⁵。

ビリー君は35名の児童(三ツ城小学校2006年度4年4組の全児童)の家庭、そら君は15名(エルムハースト小学校2006年度5年生の一部、内1名は滞在5年目の日本人)の児童の家庭にホームステイしている。

4.3 ぬいぐるみのクマの視点で記した日記

ビリー君のホームステイ最終日の日記(三ツ城小学校の児童の記述)は次のとおりである。

最後の家に着いたよ。みなみちゃん家に帰ったらすぐ、宿題にとりかかったよ！ すごいなあ。よし！ ほくも見習おう！ 写真にピアノがうつっているねー。(中略) 日本生活もみなみちゃんですら最後だから、みなみちゃんのお母さんに、たのんで和食にしてもらったよ！ すごーくおいしくて、ほったがおちちゃうかと思ったよ！ また、たべたいなー！ ほくはみなみちゃんにあえてよかったな！ そして、4年4組のみんなに一言「ありがとう!!」

※名前部分は仮名。

また、そら君のホームステイ最終日の日記（エルムハースト小学校の児童の記述）は次のとおりである。

今日はマイク・ワトソンの家に行ったよ。マイクの家はとてもすてきなんだ。ここに住めたらいいのになあ。ぼくたちは残り物の中華料理を食べて、ラクロスの練習に行ったよ。マイクのチームはとても強そうに見えたけど、ぼくはラクロスをしなからわからなかったな。マイクたちは、素ぶりやシュート練習、腕立てふせなんかの、きつそうな練習をしていたよ。選手たちは肩パットに腕パット、ヘルメット、グローブ、マウスピースとかたくさん防具をつけていたんだ。しょうとつがとても激しいスポーツなんだなと思ったよ。

※名前部分は仮名。和訳は、広島大学大学院生小松真理子・浅野博子。次頁のエルムハースト小学校児童の記述の和訳についても同様。

なお、ビリー君の日記は日本語で、またそら君の日記は英語で書かれており、それぞれ帰国後に英語、日本語に翻訳されている。

4.4 日記の記述内容の分類整理

クマの視点で書かれた日記には、どのようなことが記されているだろうか。

表5はビリー君の日記（三ツ城小学校児童の記述）の内容を整理したものである。表から、食事、心情、家族、遊びについて、多くの児童が記述していることが分かる。また、日本らしい行事や習慣・文化について書いていこうとしていると推察される。

一方、表6はそら君の日記（エルムハースト小学校児童の記述）の内容を整理したものである。表から、食事については全児童が記述し、遊び、心情については多くの児童が記述していることが分かる。

両者の大きな違いは、風呂、行事、習慣・文化、についての記述人数である。三ツ城小学校では一定の人数が記述しているが、エルムハースト小学校では記述なし、またはごくわずかの記述にとどまっている。

表5 ビリー君の日記の記述内容 (35名中)

分類	記述内容例	人数
家族	お父さん お母さん 兄妹	25
友達	友達 ○○ちゃん	7
食事	寿司 ハンバーグ 焼き肉 みそ汁 エビグラタン 豆腐	29
風呂	○○がお風呂に入っているときは	14
遊び	カードゲーム なわとび テレビ バトミントン マンガ けん玉	23
宿題	算数 割り算の筆算 漢字	13
習い事等	柔道 英語 サッカー 塾 習字	11
行事	節分 雛人形 バレンタインデー	10
習慣・文化	靴を脱ぐ こたつ 畳 お茶席	10
心情	楽しい ありがとう 感動	28
その他	買い物 仕事	—

※人数は、各分類に関する内容を記している児童の数。その他の内容は多様であるため、記述の人数を記載していない。

表6 そら君の日記の記述内容 (15名中)

分類	記述内容例	人数
家族	父母 兄弟 妹	8
友達	友達 ○○ちゃん	6
食事	ラビオリ マカロニ タコス ビザ スパゲティー レストラン	15
風呂		0
遊び	ゲーム テレビ ボール お手玉 こま 映画 ローラースケート	13
宿題	宿題 ワークシート	6
習い事等	水泳 チアリーディング 体操 美術 ラク로스 ヴァイオリン	9
行事		0
習慣・文化	ハチマキ 9時が消灯時間	2
心情	楽しい ○○は最高 ○○が一番	11
その他	買い物 仕事	—

※人数は、各分類に関する内容を記している児童の数。その他の内容は多様であるため、記述の人数を記載していない。

5 本事例の国際理解教育としての有効性

ここでは、本事例の国際理解教育としての有効性を、日記や実施状況などを通して考察する。日記の記述内容を表4に示した国際理解教育の目標と照合するならば、次のような点を指摘することができよう。

① 自文化理解、及び自己理解

本事例は、まず自文化理解、及び自己理解に有

効であると考えられよう。クマのぬいぐるみが見る世界は、ホームステイを受け入れた児童にとっての自文化であり、児童そのものである。クマのぬいぐるみの視点で日記を書くという設定が、何が自文化なのか、その特徴は何か、自分は日常生活の中でどんなことをしているのか、などの問いを生む。そして、日記を書くことを通して、児童自身がその問いに答えているのである。

② 異文化理解、及び他者理解

次に、異文化や他者に対する関心を高めることに有効であると考えられよう。クマのぬいぐるみが児童の世界をどのように見るかは、クマの出身に規定される。クマの視点で日記を書こうとするならば、まず「クマが背景に持つ文化」や「クマの帰国後にその日記を読むであろう他者」に対する思いに至り、関心が高まるのである。場合によっては、具体的な異文化理解にまで進むこともあろう。

本事例の中でも、児童や保護者から「これは外国（米国）にあるのですか。」という問い合わせが少なからずあった。異文化に対する関心の高まりと捉えることができよう。また、保護者から、「インターネットで子どもが調べています。」「親子で図書館に行って調べました。」ということも伝えられている。異文化理解への進展と捉えることができよう。

③ 自尊感情

日記の中で、双方の学校の多くの児童がクマの気持ちとして「楽しい。」などの言葉を記している。児童自身や家族の行為に対する言葉である。児童が一生懸命に楽しく取り組んだことを肯定的に捉えている表現と考えられる。自尊感情につながる心情であろう。このことから、本事例は、児童の自尊感情に対しても一定の有効性があると考えられる。

クマの心情の表現には、若干の差異も見られた。「ありがとう。」に関する表現は、三ツ城小学校の児童の記述のみに見られ、「〇〇（児童自身の名前）は最高。」というような表現はエルムハースト小学校の児童の記述のみに見られた。いずれも、自尊感情につながる表現であると捉えられるものの、特徴的である。文化的な違いを感じさせるが、ここではそれ以上を考察することができない。

なお、日記の記述内容等から他尊感情の状況に

ついては読み取ることができなかった。

④ コミュニケーション能力

日記には、三ツ城小学校の児童の記述で10件ほど、エルムハースト小学校の児童の記述で5件ほど、部分的に説明的な記述が見られた。以下に、その部分を抜き出して例示する。

次にびっくりしたのは部屋のすみっこに箱にもうふをかけたような物で、上に板がのっていたよ。山本に、これはなにと聞いてみると、こたつだよと言ってくれたよ。こたつは、その中に足をつっこんであたたまる物なんだって。（三ツ城小学校の児童の記述。名前の部分は仮名。）

日本では「子ども会」って言うのがあったんだ。ちいきの子ども達といっしょに遊んだりするんだって！（三ツ城小学校の児童の記述。）

夕ごはんは、イタリアの、中にいろいろなもの入ったラビオリっていうパスタを食べたな。（エルムハースト小学校の児童の記述。）

ジェニーを、家にいたお兄ちゃんにあずけて、「トイザラス」っていう大きいおもちゃ屋さんに行って、アメリカンフットボール用のティー（ボールをけるためにたてておく小さなスタンド）を買ったよ。（エルムハースト小学校の児童の記述。名前の部分は仮名。）

このような記述は、読み手を意識し、読み手の理解を助けるために挿入されていると考えることができる。本事例において日記を書くことが、コミュニケーション能力のうち、相手意識を持って相手の側に立った表現する機会となっているのである。

⑤ 日記の持つ特性

本事例では、児童がクマの視点で日記を書いている。日記帳は一冊で、これはクマと一緒にいろ

いろな家庭に渡っていく。これによって、三ツ城小学校では次のようなことが生まれている。

当日ホームステイを受け入れた家庭では、児童も保護者も、それまでの日記に目を通すであろう。それによって、国際理解の観点が増加し蓄積されている。たとえば、ある児童の日記の中には、父親の言葉として「日本の家ではくつをぬぐんだよ。」という部分があるが、ここから先の受け入れ家庭では、ビリー君を持ち帰ると靴を脱がせてから家にあげているのである。

また、相手意識という点では、米国の児童に対してだけではなく、以降のホームステイを受け入れる同じクラスの児童に対する相手意識も感じられる。この点についてはむしろ保護者の方が強いのかもしれない。保護者から「我が子には、今までで一番丁寧に書くように指導しました。」ということが伝えられている。

6 おわりに

本事例では、国際理解教育の目標のうち、自尊心、自文化理解、異文化理解、自己理解、他者理解、コミュニケーション能力に対して有効性が認められた。しかし、それらは国際理解教育の全体から見ると、その一部分である。学校において、プロジェクトを実施する際、国際理解教育としての位置や限界を意識しつつ、そのねらいを明確にしておくことが必要であろう。

本事例では、それぞれのクマが帰国の後、パートナー校の児童によって書かれた日記を通して学習がなされている。しかし、プロジェクトの実施時期や翻訳の関係で、十分な時間を取ることができなかった。また、本研究においても、事後学習の状況についてデータ収集や考察を行うことができなかった。

このような点を残された課題とし、引き続き研究を進めていきたい。

謝 辞

「iEARN」代表の高木洋子氏には、広島大学グローバルパートナーシップスクールセンター(GPSC)が主催した「第1回学校間国際交流フォーラム」(2005年7月)などで、このプロジェクトほか国際理解教育に関する多大なご示唆を頂きました。心より感謝申し上げます。

また、本事例のパートナー校のスーザン氏(Ms. Suzanne Hachmeister)、及び日常よりGPSCの活動を支援して下さっている米国ノースカロライナ州立イーストカロライナ大学のレッドフォード氏(Dr. Carolyn Ledford)に心から御礼申し上げます。

注

- 1 「異文化理解教育」「多文化理解教育」「グローバル教育」など様々な概念や用語があるが、ここでは、それらを広く捉えて「国際理解教育」で総称する。
- 2 「テディベアプロジェクト」は、後述するように、「iEARN」が行っているプロジェクトである。「JEARN」は、iEARNの日本センターであり、日本の学校が関係するプロジェクトを実施している。本事例は、このプロジェクトに直接参加する形で実践されたものではなく、このプロジェクトから多くを学び、同様の取り組みを行ったものである。この「テディベアプロジェクト」の名称はすでにかなり認知されており分かりやすいことから、表題として使用させて頂いた。
- 3 紅林富子・野田隆ほか「参加型学習、地域資源の活用による国際理解教育」、静岡市教育センター「研究紀要」第1号、2005年。
www.center.shizuoka.ednet.jp/pdf/kkiyou1.pdf (2007年11月23日閲覧)より。
- 4 川崎市総合教育センター平成13年度国際理解教育研究会、佐藤裕之「川崎市内の中学校における国際理解教育の取組の現状と課題」、「第3回初等中等教育における国際教育推進検討会配付資3」2004年、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026shiryou/05060301/005.htm (2007年11月23日閲覧)をもとに朝倉が表を作成した。
- 5 東京都教育委員会「東京都の国際理解教育」、東京都教育委員会「国際理解教育推進資料」、2004年、p.2、
www.tnet.metro.tokyo.jp/~kyouiku/02/1516.pdf (2007年11月23日閲覧)をもとに朝倉が表を作成した。
- 6 紅林富子・野田隆ほか、前掲論文、表題は引用者が付した。

- 7 iEARNについては、Web ページで次のとおり自己紹介されている。“Started in 1988, iEARN (International Education and Resource Network) is the world’s largest non-profit global network that enables teachers and young people to use the Internet and other new technologies to collaborate on projects that both enhance learning and make a difference in the world.”
<http://www.iearn.org/> (2007年11月23日閲覧)
- 8 The Teddy Bear Project
<http://www.iearn.org.au/tbear/> (2007年11月23日閲覧) より。
- 9 JEARNについては、Web ページで次のとおり自己紹介されている。「JEARN (ジェイアーン正式名称は「グローバルプロジェクト推進機構」) は、世界最大の国際教育ネットワーク、iEARN (アイアーン) の日本センターとして、日本で初めての本格的な国際協働プロジェクトを推進する教育NPO (特定非営利活動法人) です。」
<http://www.jearn.jp/japan/index.html> (2007年11月23日閲覧)
- 10 村上芳子「iEARNプロジェクト (テディベアプロジェクト)」2002PCカンファレンス論文集 www.ciec.or.jp/event/2002/papers/htdocs/ka
[na_all.html](http://www.ciec.or.jp/event/2002/papers/htdocs/ka) (2007年11月23日閲覧) より。
- 11 小篠敏明・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥「学校間のグローバルパートナーシップ樹立に関する考察 — 広島大学地区および米国ノースカロライナ州イーストカロライナ大学地区におけるパートナーシップづくりを中心に—」, 大阪教育大学編『未来への架け橋2002—グローバル・パートナーシップ・スクール』米日財団奨学寄附金プロジェクト報告書, 2004年, pp.169-177。
- 12 Talented And Gifted Class
- 13 2005年広島大学大学院教育学研究科内に設置。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/gpsc/index/html> 参照。
- 14 林万青也は、2006年度広島大学大学院教育学研究科「体験型海外教育実地研究」に参加し、米国ノースカロライナ州の相手校を訪問している。また、相手校児童に対しての授業を実施している。小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究報告」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007年, pp.43-56, 参照。
- 15 曜日等, 場合によっては2泊以上となっている。